

時事新報

明治十八年十月八日 (木曜日)
舊乙酉九月朔日

日出版六時三十分
月出版五時三十分
日出版五時三十分
西曆一千八百八十五年

時事新報定價

(日曜日ハカリ休刊)

一月三圓〇二圓月金六十五圓〇三月月金九十圓〇六月月金一百三十五圓〇一年月金二百七十圓〇郵費在內

○三圓月金六十五圓〇三月月金九十圓〇六月月金一百三十五圓〇一年月金二百七十圓〇郵費在內

○三圓月金六十五圓〇三月月金九十圓〇六月月金一百三十五圓〇一年月金二百七十圓〇郵費在內

○三圓月金六十五圓〇三月月金九十圓〇六月月金一百三十五圓〇一年月金二百七十圓〇郵費在內

○三圓月金六十五圓〇三月月金九十圓〇六月月金一百三十五圓〇一年月金二百七十圓〇郵費在內

時事新報廣告代價

時事新報に廣告を御出し被成候御方にて御座用中ゆる
其廣告文を御認め被成候御無之御方ハ口上なり書
付あり唯其大體御申附け相成候へば當社にて
程よく其文と作り直ちに紙上に掲載候御取計らひ可申
候此段廣告仕候也

東京日本橋區通三丁目十一番地 時事新報社

時事新報

左の一篇ハ米國ボストン遊學の社友が英國倫敦ス
ペンテート新聞より採譯譯出しく寄送せしもの
なり文中世界の人類過去未來の成行を觀るに足る
可きものあれ掲げて本日(の)社説とす

白人遂に此地球を領す可し

世界の歴史中、人の一寸氣の付かざることを最も重
要なる事なり即ち近來白人種の非常な増殖したる一事
なり今と云ふこと二百年前紀元千六百八十四年の頃ハ
白人の勢力九弱其數も僅に全世界人口の十分の一に
なり尤も其時と雖も白人は各人種の中にて最も活
躍進歩なりしは疑も無きことなれども去連此白人が今
幾大に力を得全世界ハ人民抵抗して之を壓倒す可し
白人は思も驚らざるなり蓋し當時亞細亞人種の
優勢尙未た止まず土耳其の人馬と埃國ノキエナの城下
に在り地中海は亞非利加の兵艦出沒横行し東方亞細
亞に於ては印度の海岸二三の地とを除くの外未だ歐洲人
と見ざるものさへ無し又西半球に於ては南亞米利加は
既ハ白人の併呑する所となりたれども北亞米利加は
白人の勢力益々盛んとしてインディアンとの戰爭に實に
危く又恐る可きものと人皆思ひ居たり其他亞非利加大
陸の多く黒奴の所有に歸し、太平洋の諸島未だ白人の
影を見たるものなま白人種前途の望甚々漠然たりし
ものと謂ふ可し

下七千七百八十四年に至れば白人の勢力稍盛かるを見
る可し即ち南亞米利加は既に其所有となり北方亞細
亞は全く之を併呑して東印度地方に於ても亦次第に
白人の勢力漸次大陸南都には時々白人の往來するあり
然れ共此時白人の數は凡そ一億五千萬即ち全世界の
人口の七分の一に過ぎざれば其勢力未だ以て他人種を
併呑す可し蓋し其時以來北亞米利加に於てはインディ
アン未だ全く止まず印度に於ては諸種族ハ英人に併
呑す

者相續て起り之を征するの困難一方ならず又西方亞
細亞及び東方亞非利加に於ては土人の勢頗る強固該地方
に在る白人は殆ど其奴隸たるに過ぎず之を要するに當
時白人種盛の兆ハ既に充分ありしと雖も未だ其時
期の至らざりし姿あり

然るに千七百八十四年より千八百八十四年又至る百年
間に白人種の勢力増加し其速度ハ古今の歴史に於
て此例を見ざる所あり千八百八十五年英國ハギン
ン(John Bull)の統計表に依り現今全世界居住する白
人の數四億二千萬なりしと云ふ即百年間に白人の數殆
ど三倍増加したる割合なり豈盛なりと謂はざる可ん
や之に反して同年間其他の人類の増加ハ甚少なり今
白人の數を全世界の人口に比すれば凡そ三分の一を
占む可き斯くの如く白人ハ其數増加すると共に其身
體之益強大を致し其智力ハ益々發達し實現今人類中
最も上等の種族と云へば白人を置て又誰か有らん哉之
に加ふる其發明工夫に係る汽車汽船電信等を利用して
地球上を横行するも恰も無人の里を過るが如く一
人として敢て之を妨ぐる者無く又之を妨げんと欲する
妨げ得る者無き(今既に全世界の人類として白人と同
しく近世文明の利器を所有せしむるを得可きや甚だ疑
せしむるも果してよく之を頼るを得可きや甚だ疑
ふ可し)今此地球上に於て歐洲文明の風潮に抗し依然
舊慣故例を墨守して一國を建るもれば唯東洋一の支
那帝國あるのみ實支那人の中は若干の船と有して
亞細亞の南方及び亞非利加の東岸を航するもの少
とせせ然りと雖も其船の大體下等船形の者にして
之に乗して海を渡る者も亦小商人海賊等に過ぎず之
要するに方今世界中迅速堅牢の軍艦商船ハ皆白人の
手に成て白人の手に存すと云ふも過言ハ非ざる可し試
今日支那が歐洲の一國と戦端を開きたりし假令すべし
扱其時に當て支那政府は能く數萬の軍勢を其軍艦に
せ支那人を將て其艦隊を率ひしめ波瀾を越て歐洲
に到り白人の住所上陸して白人の都市を砲撃するを
得べき哉我輩故らに之を答を記さるるも讀者既に自
かか知る所ならん蓋し支那國の獨立を保つ偶然の機
俾て其早晩白人の爲に侵略を被るべきは衆人の期を
る所なり

今若し白人種が會て亞非利加南部の蕃民と盛殺して其
土地を略取したるが如き方便を用て全世界の國民を容
赦無く攻撃せば五六年と出ずして此世界は全く白人の
所有物となるや疑ふ可らず又依令此の如き過激の手段
を取らざるも現世界が白人の手に落ちるの決して遠きに
非ざるなり目下エウロプト及び東京地方は事跡を見ても
白人が全世界を併呑するの望あり又力あると知るは難
きに非ざる可し今や南亞米利加は北のアラスカより
南のペナゴヤに至る迄蠻く白人の支配を受け北方亞
細亞に於ては西はユタ山より東は黃海に至る迄又其
所有より其他印度及び安南及び南洋諸島の島嶼は實際
ノドなり皆白人の支配を受け太平洋無敵の島嶼は實際

悉く白人の所有に外ならず又近來は白人の亞非利加に
殖民する者甚多南亞非利加、佛領亞非利加ナイロヤ
流域 (Valley of Niger) ナハ流域 (Valley of Congo)
等百方より内地に進入する者陸續絶えず亞非利加大陸
が白人の居所とあるも蓋し遠況に非ざる可し

右の地續に歐羅巴大陸を加ふれば現今白人の領地は全
世界の過半を占ると見る可し而して今日白人ハ増殖は
益々盛にして年々數十萬の移民ハ歐洲と去れども之が
爲め歐洲の人口は些小の影響も與へず人民の數は
益々多を加へて止る所を知らざるもの、如し世界中人
口の多寡は白人種と競争する者は唯蒙古人種有る而
已なれども此人種之往古曾て非常な増殖したること
あるにも係らず今は殆ど其増殖と止たる有様にて到底白
人の勢ハ在ては繁榮すること能はざる者に似たり右の
如く他の人類は依然舊慣に如く白人獨り増加すれば他日
此世界が白人の世界となるは疑ふ可らざるものと云ふ
やギン(John Bull)の統計に依れば今後百年を經れば白人
の總數十億餘となる等なりと云へば適者生存の大法に
從ひ蒙古、マレイ等の人類次第其勢力を失ひ白人の足
下に服従するは必ず百年以内のことならん云々

官報

○東京府達内第百二十五號 郡役所所長役場
正當ノ故ナク徵集ニ應セス若ハ徵集ニ洩レ長齡三十
二歳ヲ超過シ徵集ノ者ハ其時々處分伺出候處自今年
齡滿四十歳迄ノ者ハ事由ヲ詳記シ郡區長之ヲ徵集之部
ニ記載差出ス此旨相達候事
明治十八年十月七日 東京府知事渡邊洪基
○舊東京外國語學校兼東京商業學校御用掛兼野計
六日文武省於て左の通御付けられり
東京外國語學校御用掛 磯野
兼東京商業學校御用掛 磯野
但年俸金千二百圓下賜候事

雜報

○虎列刺病者 福岡縣に於て虎列刺病患者は去る三
日四日の兩日間、喜鹿、御井、三瀨、山門三池上妻、下
妻、上毛の八部に新患者三十三人新患者死亡廿二人
治癒一人あり又三池郡大牟田アリサナ、スノハナは初
發より一昨五日迄三十三人の患者を發生し内十六人
死亡せり該村民は平常石炭の運搬を以て生活を爲す者
にして特に貧民多く益々憂鬱の兆あるを以て炭坑工事
休業し運搬法を實施するに決せり(内務省報告)
(以上本年十月七日官報)

○學術研究會 教團附の將校一同はこの度學術研究
會を開き兵理を研究之歴史と設置し用兵の改良を圖
んと目下協議中あり

○大學林建設 岡山縣下岡山區二日市日蓮宗妙勝寺は
該地方の檀林なるが今度宗門の擴張を謀り徒弟と養育
する爲に同縣下御野郡矢坂村へ大學林を建築する筈に
くろの敷地千五百餘坪を購置したるよし

○清國新軍艦 昨年來數々本紙上に記きたる清國新造
の甲鉄艦續定遠の二艘が近日香港に到着せし由は既
に記載せしが今又右新造艦の構造を聞くに二艘共に船
形の甲鉄艦ニルトコルツエツトにして双方共に艦
體七千長三百英尺幅五十八英尺吃水二十二尺蒸氣機
關は七千馬力の式式機と云く八個の汽機より蒸氣を供
給し一時四十四節半の速度を以て駛航すべく又二艘共
に船の中央より前後に各一ツ砲臺都合四ツのタルレツ
ト(砲臺)を備へ中央なる二ツのタルレツトは各日
徑三十一センチメートル半目方三十一の長さ大砲二

門宛と裝置せしめ
トルレ五噸砲一
砲として此外は
は孰れも据付け
を廻はしては
鉄の厚さは船の
る木材の厚さは
護するに必要と
れば百三十英尺
甲鉄も中央なる
二ツは凡そ二五
の橋(橋)とは船
たる甲板上の小
深さ四英尺程の
揮官が其中に在
餘の空軍艦にて
設けたるもの
上には電氣ラン
めさるよし右の
行きて同所に
共に頗る複雑
手にて巧みに
らすと香港邊に
各長さ七十英尺
として所有する
に長さ百二十
れ來りて其内
持行く等あり
○宮城縣茶現
芽甚しく自中
芽常業者之進
て稱ありし目下
圓下等八圓に
りし
○石川縣茶況
設け製造せし
より常に公平
如し

平均十錢、炭
雜費百斤に付
右の通りなき
三分方の利益
中等同甘圓下
○栃木縣下二
野澤坊積所は
り木綿と紡績
なりしも種々の
夏の初頃より
東北二里を距
ちて之を通せん
二尺陸寸二個
治十四年七月
車は五十馬力
下るものと三
頗る費用と要
築の工場一圓